

津軽野をゆく

結城 文

同じ年に生を受けたる縁えだしにてかたみに歌を詠みて読みあふ

古希の年の発足をして十年余そのうち三人みたりはすでに世になし

十月の末の津軽野 収穫を終へて乾ける田の面のつづく

津軽野はまことに広し刈田の上ただべうべうと風のゆくなり

赤き葉はあくまで赤く黄なる葉はあくまで黄なり津軽の里山

頂きの鋭く尖りし岩木山 雲なき真昼すがの空に清しき

紙・木・竹まこと素朴な素材もて作られし「立ち見ねぶた」の迫力

いまだ見ることの得ざりし「ねぶた祭り」五所川原ねぶた会館にしのお

ていていと巨木直ぐたつ長勝寺——津軽藩主の五基の霊廟

津軽野は「みちのく」すなはち「道の奥」かぐろき海に道は絶たれつ